

泉鏡花「年譜」補訂(七)

吉田昌志

本稿は、先年刊行した岩波書店版『新編泉鏡花集』別巻二(平成十八年一月二十日)収録の泉鏡花「年譜」の補訂で、本誌七九五号(平成十九年一月一日)掲載の「補訂(一)」、七九七号(平成十九年三月一日)掲載の「補訂(二)」、八一九号(平成二十一年一月一日)掲載の「補訂(三)」、八二二号(平成二十一年三月一日)掲載の「補訂(四)」、八二六号(平成二十二年八月一日)掲載の「補訂(五)」、八四三号(平成二十三年一月一日)掲載の「補訂(六)」に続くものである。

内容は、「誤記・誤植の訂正」、「本文の訂正・追加」、「典拠の訂正・追加」、「新たな項目」、の四部に分ち、書式を次の通りとする。

- 一、表記は、原則として右「年譜」に準じた。
- 一、「年譜」本文の後に、【典拠】として、文献の原文、未公刊資料の翻字等を示し、典拠が複数の場合は番号を付して併記した。【注記】の項には、内容の解説、考証等を記した。
- 一、引用文の仮名づかいは、原文のままとし、字体は概ね現行の印刷文字に改め、総ルビの場合は、読解に必要なルビを残した。
- 一、引用文の中略部分は、総て「(…)」で示し、前略、後略はいちいち断わらなかった。引用文中の誤記・誤植は、「」内に補正した。

一、典拠文献が複数項目に重出する場合も、そのつど項目ごとに示して、書誌的事項の記載を省かなかった。

一、「本文の訂正・追加」では、訂正部分、新たな追加部分に傍線を付して区別した。

一、文中の敬称は、原則として省略した。

一、必要に応じて、「*」のあとに注記事項を補った。

【誤記・誤植の訂正】

*今回は無し。

【本文の訂正・追加】

明治四十三年(一九一〇) 庚戌 三十八歳

四月 十五日より、浅草美音館で、映画「通夜物語」(製作吉沢商会)が封切られると報じられたが、実際には「無名氏作 悲劇「女の意地」」

〔柴田善太郎一座〕として上映された。

【典拠1】「しばいとゆうげい」(『都新聞』明治四十三年四月十五日付・三画)

各所の活動写真 十五日より替るは左の如し

浅草公園電気館 英国オクスフォード対ケンブリッジ大学の短艇競争、悲劇

橋英男喜劇写真屋の親子、姥ヶ餅、西洋桃太郎フィ「ン」ランドの急流(…)

同美音館 通夜物語、本蔵下屋敷、ニューヨーク所見、暖爐の古物、実物喜

劇岡本都一座

【典拠2】「遊覧案内」(『都新聞』明治四十三年四月十八日付・四面)

四月十五日取替	淺草公園	美音館
無名氏作	柴田善太郎一座	實川延太郎一座
悲劇「女の意地」	暖爐の古物	岡本都、外一座
本蔵下屋敷敷		
ニューヨーク所見		
實物喜劇		

【注記】

「年譜」では、日本映画史研究会編『日本映画作品辞典・戦前編』(科学書院、平成八年五月二十五日)に拠って記したが、「都新聞」の予告に「通夜物語」とあるものの、実際の案内広告では題が替っているので、本文を訂正する。出演も実川延太郎の名を記したが、これは別の演目への出演と判ったため、広告により「柴田善太郎一座」とした。

予告と広告とを比較した結果、「通夜物語」が「無名氏作」の「悲劇「女の意地」と改題されて上映になったと判断した。「女の意地」という題名は「通夜物語」の内容に沿っているからである。

出演の柴田善太郎は、演芸画報社版『日本俳優鑑』(明治四十三年三月一日)に「優は明治八年三月十日の出生。その十七歳の時初めて川上音次郎の門を叩き幾もなく一頭地を抜き一時川上座の四天王の随一と迄呼べたり。」とある新派の俳

優。昭和十五年五月十六日に歿した(三省堂版『日本芸能人名事典』平成七年七月十日)。

「一門一答録 泉鏡花と梅村蓉子」(『映画時代』四卷一号、昭和三年一月一日。岩波書店版『鏡花全集』別巻収録)中に、「先生のお作で映画になりましたものは？」の問いに答えて、

え、私のものは、「葛飾砂子」つてのがありますし、もつと前には「通夜物語」と云ふのもあります、お礼が金十円也にベルモットが二本。そろばんを先へ出しては体裁が悪いかいけれども、そんな事より、さつき云つた衣もの、皺だらけがいやで断つたんですがね、柳川春葉が中へ入つて、何でもと云ふので撮影しました。何とか云ふ会社です。役者も知りません。最も見もしなかつた。

とあるが、これが美音館上映の「通夜物語」をさすのか、資料を欠いていて判らない。映画の内容の詳細について、調査を続けたい。

大正三年(一九一四) 甲寅 四十二歳

九月 十五日より、浅草三友館で日活向島製作の映画「通夜物語」が封切られた(監督・出演者等不明)。

【典拠】「活動の部」広告(『都新聞』大正三年九月十六日付・四面)

九月十五日	大馬路	三友館
泉鏡花氏作	探偵王全五巻	
通夜物語	最大長篇全一巻	
英獨佛三ヶ國に渉る大探偵		
大冒險大活劇		
天馬以上		

【注記】

「年譜」では、日本映画史研究会編『日本映画作品辞典・戦前篇』(科学書院、

平成八年五月二十五日)に拠って、「九月下旬」と記したが、年次を「大正二年」と誤記したため、これを「大正三年」に訂正し、典拠の新聞広告により、封切日を「九月十五日」とした。映画「通夜物語」は、九月二十七日が最終日、二十八日からは「現代人の子」^{悲劇人の子}「社会的怪炎」^{大惨劇}が上映されている。

三友館は、明治三十九年創立の活動常設館で、もと開進館という勸工場を買収、改築して開場し、その後日活が借受けて長尺物を上映したところ大いに人気が出たが、大正五年四月より天活(天然色活動写真株式会社。大正三年三月に日活退社組が創立)が買収した(以上、米山蟻兄「浅草公園観せ物総捲り」「新演芸」一卷三号、大正五年五月一日、および田中栄三「映画史覚えがき(その九)」「シナリオ」四巻一号、昭和二十三年八月一日、を参照)。

典拠と同じ紙面の「芝居の部」には、明治座の「婦系図」(九月五月初日)の広告がある。河合武雄のお蔭、伊井蓉峰の主税のこの上演のために鏡花は「湯島の境内」を書下した(「年譜」参照)。

この年九月は、浅草で映画、日本橋(久松町)で芝居、二つの「鏡花もの」の興行があったのである。

大正四年(一九一五) 乙卯 四十三歳

二月 十四日より、オペラ館(浅草公園内)で、細山喜代松監督の映画「瀧の白糸」(製作日活向島)が封切られた。

【典拠】「活動の部」広告(「都新聞」大正四年二月十四日付・四面)

替差りよ日四十當	成功美談苦学生特別確稿
本郷座當り狂言	新派人情劇
たきの白糸	浅草公園
實物餘興(ダンス)	オペラ館

【注記】

「年譜」には、日本映画史研究会編『日本映画作品辞典・戦前編』(科学書院、平成八年五月二十五日)に拠って記したが、新聞広告により、封切日と上映館を補った。同紙二月二十七日には「新派家庭大悲劇愈々現る」として次の興行「女夫波」の広告が載っているから、二週間ほどの上映だったことになる。

米山蟻兄「浅草公園観せ物総捲り」(「新演芸」一卷三号、大正五年五月一日)に「オペラ館は、日活直営の活動写真館にて間口十二間奥行十四間、新派悲劇を専門としてゐる」とある。

広告中に「本郷座当り狂言」とあるが、現在までのところ、本郷座での上演は大正六年四月興行(二十一日初日。全九場。白糸⇨木下吉之助、村越欣哉⇨梅島昇、切淵剛三⇨栗島狭衣等。以上「芝居と遊芸」「都新聞」大正六年四月二十日付・四面に拠る)のほかに確認できない。四年二月以前に連鎖劇での上演の可能性もあり、今後調査を続けたい。

本作はオペラ館上映後、東京市内を巡回したらしく、高梨輝憲編刊『小名木川物語』(昭和六十二年三月。刊行日記載なし)に、開館直後の深川「扇橋館」の思い出を語って、

その開館日には無料で入場させるというので私も見に行った。このとき見た活動写真は旧劇(時代物)が尾上松之助主演の「天狗小僧霧太郎」新派悲劇(現代物)が立花貞二郎主演の「瀧の白糸」であった。立花貞二郎は新派の女形である。それはいずれも大正三、四年のころだと覚えている。

とある。筆者の高梨は明治三十八年生れ、大正四年には数え十一歳である。文中の「天狗小僧霧太郎」は、前記『日本映画作品辞典・戦前編』によれば、日活京都製作、牧野省三監督、尾上松之助主演の映画で、大正三年七月上旬、浅草千代田館封切、とあるが、「都新聞」(同年六月二十九日付・四面)には「当六月廿七日

より」とあり、七月十三日まで同様の広告が出ているので、「大正三、四年のころ」という高梨の回想には信憑性がある。したがって、「瀧の白糸」に立花貞二郎が白糸役で出ていたことも確実であろう。立花については、後掲大正六年三月一日の項を参照。

大正四年（一九一五） 乙卯 四十三歳

三月 四日、午後三時より、本郷座の一番目狂言として「日本橋」（全六幕）が初演された。当初、二日初日と予告されたが、「大道具其他の都合にて」四日初日となり（『東京朝日新聞』一日付）、二日付の同紙に以下の配役が掲げられた。お孝Ⅱ喜多村緑郎、葛木晋三Ⅱ伊井蓉峰、清葉Ⅱ木村操、お千世Ⅱ花柳章太郎、五十嵐伝吾Ⅱ小織桂一郎、鮎屋仁作Ⅱ福島清、銀造Ⅱ藤井六輔ほか。上演中（日不明）、千章館が鏡花を招いた席で観劇していた久保田万太郎は、鏡花に誘われて楽屋に喜多村緑郎を訪ねた。吉井勇は、各配役を歌に詠んだ劇評『『日本橋』十人十首』を「演芸画報」（第二号第四号、大正四年四月一日発行）に寄せた。客入りは芳しくなかったが、花柳のお千世は出世役となった。同じく上演中（日不明）、千章館堀尾成章が文科大学生を招いた席で、江口渙は、豊島與志雄、山本有三、山宮允らと知り合ったという。

【典拠1】 本郷座広告（『都新聞』大正四年三月四日付・三面）

本日午後三時開幕
均四十銭
本郷座

【典拠2】 江口渙『新思潮』勃興時代のこと（『文章倶楽部』十一卷九号、大正十

五年九月一日）

私が豊島與志雄、山本有三、山宮允、などの人々を正式に知ったのは、本郷座で泉鏡花氏の「日本橋」が伊井や佐織の手で上演された時の事ではなかったかと思ふ。何でも当時「新小説」の編輯をしてゐた本多さんと云ふ老人の肝煎りで「日本橋」を出版した本屋の主人の堀君が、文学志望の文科大学生を十四五人、つまりネキスト・ゼネレーションを優待すると云ふやうな意味で、本郷座へ招待した事があつた。

その時、右手の二階棧敷へ陣取つた私達をひどく驚かした事件があつた。それはかうして招待されたのは、私達文科大学生ばかりだと思つてゐたのに、思ひがけなくも一人の若い、そして顔も体も思ひ切つてげげばしい満艦飾を施した美人が、吾々の棧敷の一隅へ何時の間にか割込んで来たからだ。女と云ふものに縁の遠かつたその頃の私達の物好きな視線は、必然的にその美人へばかり集められたのは云ふまでもない。お蔭で芝居の方は半分位も見ずになりました。

だが、その時、その美人が誰であり、かつ如何にして吾々の棧敷へ侵入して来たかと云ふ事についてはつひに知る事が出来なかつた。然し、二三日経つてから、それが当時売出しの女優木下八百子であり、そして、山本有三君が招待者や世話人には無断で八百子を恋人然と伴れ込んで来たものと云ふ事をきいた時には、遅時きながら大いに憤慨したものだ。殊に、岡栄一郎君などは一ト月以上も頭へ湯気を立てて怒つてゐた。

【典拠3】 山本有三「すが目の悪魔」「新思潮勃興時代」中私に対する記事への反駁（『文章倶楽部』十一卷十号、大正十五年十月一日） * □は欠字。「」内は引用者の補足。

すが目の悪魔がゐた。彼は何でもものを斜に見ないではゐられなかつた。丁度蟹が人間の歩くのを見て、「あいつは何だつてあんな歩き方をするのだ。

あいつは己のやうに横に這はない。きつと凄い奴に相違ない。」といったのと、同じやうなことをいふ男であった。

× × ×

昔若い愚かな学生がゐた。新劇壇が起りかけた頃のことである。ある女優と近づきになった。その女優は喜多村が好きであった。ある時鏡花氏の『日本橋』を喜多村がやることになった。彼女はしきりに見たいといふ。たまた／＼彼のところに初日の招待券が一枚届いた。彼は自分でも見たかつたけれども、その切符を彼女にやつて自分は見に行かないことにした。ところが彼の友に新派の嫌ひな男がゐた。不思議に彼も亦切符を一枚貰つてゐた。名もない学生にどうして招待券が送られたのか二人には見当がつかなかった。が、兎に角芝居の見たい□「彼」は新派の嫌ひな男の切符を持つて劇場に行つた。席に案内されると彼は魂が飛び上□「る」程驚いた。ずらつとそこに列んでゐるのは彼の友達許りであつた。彼はしまつたと思つた。こんなことか「な」ら女に切符なんかやるんではなかつたと思つた。まだ来てゐなかつたから何とか止める工夫はないものかとやきもきした。愚かな彼はやきもきするだけでその場を切抜ける術を知らなかつた。その内女が来てしまつた。彼は逃げ出すことも出来ないで、たゞわく／＼しながら小さくなつてゐた。

その事が十何年後に、すが目の悪魔によつて書かれた。「あの男は凄いや奴である。女を連れて招待席にやつて来た。」

× × ×

その後彼は彼女と喧嘩をした。彼女は、「あなたばかりが男ではありませんよ」といはぬばかりのことをいつて、あてつけがましく彼の友人の所に走つた。彼は口惜しかつた。併し彼女にさう出られるとどうしても降参するわけに行かなかつた。「走るんなら走れ。」と思つた。しばらく対戦がつゞいた。

その間彼は随分辛かつた。併しちつところへた。そしたらやがて彼女の方から戻つて来た。が、それから又出て行つてしまつた。

すが目の悪魔は、それを十何年後にかう書いてゐる。「彼は彼女とグルになつて彼の友を翻弄した。彼女の蔭で糸を引いた悪辣な男は彼である。」

【注記】

典拠1により、開演時間を補つた。

江口文の「堀君」は「堀尾君」の誤り。「本多さんと云ふ老人」は本多嘯月のことであろう。引用を省いた部分には、山本と久米正雄が木下八百子を取り合つて、久米が敗れたこと、その後、憤慨した久米が「手品師」(「新思潮」第四次)二号、大正五年四月一日)を発表するや、山本が激しく憤り久米撲滅を謀つたことなどが記されている。大正四年当時、江口は帝大英文科の四年目(六年に退学)、山本は帝大独文科卒業の年、兩人とも明治二十年生れの二十九歳であつた。

木下八百子は、高澤初風『現代演劇総覧』(文星社、大正八年三月一日再版)に、

東京八等(新派)俳優、定紋不明、本名木下徳子、明治二十五年東京に生る、父は某省の官吏なり、築地の女子英語学校卒業後、大阪松竹の女優募集に応じて始めて舞台の人となり、程なく帰京して川村花菱氏の創作試演会に『雪』の芸者上りの女房に扮せしは、大正二年五月なり、同十月伊庭孝の新劇社に入り有楽座に出演せしが、後浅草公園みくに座其他の新派に加入して、頗る人気を蒐めたる事あり、今は新派と共に多く地方を巡業す、現住所日本橋区浜町二ノ七。

と出ている。「全国俳優銘鑑」(「演芸画報」八年一号、大正三年一月一日)の「新劇社」の項には、本名「木下のり子」、生年月「明治廿五年六月生」とあるが、歿年は確められない。田中栄三『新劇その昔』(文芸春秋新社、昭和三十一年十月三十日)には、「八百子は意気の強い達者な女優で、セリフをいいながら、相手をグ

ングン押して行く妙なクセがあった、「意気が強くて物凄いのので『うわばみ』という綽名があつた」とも記されている。

永野賢『山本有三正伝』上巻（未來社、昭和六十二年七月二十七日）によれば、山本とは大正三年九月に知り合い、翌々年の五年に八百子の愛心から別れた、という。同書には、その経緯を綴った山本の手記も翻刻紹介されている。

「日本橋」上演の実態については、別に稿を改めて考えたいが、堀尾成章の千章館は、この上演に際して、開演期間中、刊本『日本橋』の三版を実価一円二十銭・送料八銭のところ、特価一円（特別割引券封入注文の場合は送料無料）で販売し、加えて「本郷座観劇優待券」を発売した（『都新聞』大正四年三月十一日付・一面「広告」欄）。同紙（大正四年三月十日付・三面「芝居と遊芸」欄）に報じられた開演時間、一石橋の場が午後三時三十分、最終稲葉家座敷の幕開きが午後九時五十分である。

なお、江口、山本と同席したという豊島與志雄、山宮允に、この件を回想した文章は今のところ確認できていない。

大正四年（一九一五） 乙卯 四十三歳

十二月 十六日、第十三回紅葉祭（於芝紅葉館、午後三時より）に出席した。この席上、吉井勇を紅葉未亡人喜久子に引き合せた。会の模様は十日付の「都新聞」に写真入（鏡花は左端に立つ）で報じられた。

【典拠】「昨日の紅葉祭」（『都新聞』大正四年十二月十七日付・五面） *引用は国立国会図書館蔵のマイクロフィルムに拠る。

尾崎紅葉が歿してから十三年昨日は其の十三回の紅葉祭を故人の友人門弟の人々の主催で午後三時より芝山内の紅葉館で開かれた小波氏の開会の辞があつて筑前琵琶の高峰恵美子、喜美子の両美少女の夜討會我、次いで小杉天外

氏の令嬢文子が舞ひの手振りも華やかな保名狂乱日本橋鶴次の新内千両幟、同じく六琴の踊り浅妻、唄はお勝、姫松、三味線は八重、寿々江幕を卸て風谷の名人仲藏、快弁人を酔はした後酒宴に移り故人の逸話に興も湧いた扱て宴後には紅葉館美人連の五節の舞あでやかにこそは舞ひ収めて九時散会、十三回忌といふだけに久闊りの人も見えて来会百余名と註せられた



紅葉祭（昨日）正面の寫眞は放尾崎紅葉、寫眞の前に端座せよは向つて右末七人、左令嬢、左右は舊同門下の諸文士

【注記】

「年譜」には、生田葵山宛の案内葉書（書簡番号一四〇）と吉井勇「鏡花先生追憶」（『洛北隨筆』甲鳥書林、昭和十五年四月十日）に拠って記したが、写真入の新聞報道を見出したので、これを補った。

写真のキャプションは誤りで、向って右が令嬢、左が未亡人、であろう。鮮明を欠くため断言できないが、鏡花（左端）の右側は柳川春葉、紅葉肖像を隔てて右側に一人立つのは小杉天外、前列右端は江見水蔭、一人置いて石橋思案、未亡人の左は武内桂舟ではないかと思われる。

この十三回忌の会で、小杉天外令嬢文字（明治三十二年二月生れ、昭和二十三年五月十七日歿。享年五十。当年十七歳）の「保名」を舞っているのが目を惹く。天外と紅葉との関係については、かつて拙稿（『手紙のなかの紅露追鷗』日本近代文学館編『文学者の手紙1 明治の文人たち』博文館新社、平成二十年三月三十一日）で、紅葉の天外宛書簡を中心に解説したことがある。紅葉は天外の文壇的出発に際して盡力、天外の結婚前後には「親類つきあひの中」（天外宛、明治三十年十月十四日付）にまで至ったものの、翌三十一年ごろから疎遠になった。右拙稿には疎隔の因由を、「一説には、島村抱月、後藤宙外らとともに創刊した『新著月刊』で、天外が川柳選者をした際、紅葉の反感を買ったためであるという。」と記したが、その後、徳田秋聲『思ひ出るまゝ』（文学界社、昭和十一年四月二十日）に、

天外氏は（…）ちよつとしたことで、今まで出入してゐた紅葉先生の処へも来なくなつてゐた。その原因はわかつてゐるが、私達がまだ塾にゐる時分、或る夜鏡花氏や風葉氏などが、先生を囲んで気焰を挙げてゐた時、明白な記憶はないが、天外氏の川柳だったか俳句だったか、それとも何かさういつたものゝ撰でもしてゐたのか兎に角それが話題になつて、先生が洒落に冷かしの葉書を出したのが、天外氏の気持を悪くしたものらしい。最近天外氏は言

つてゐた。何も紅葉さんに頼らなくとも、己だつて一と奮発すれば何うにかなると思つたと。

とあるのを見出したので、「一説」の根拠の一つとして補っておきたい。「塾」とは、紅葉宅の隣にあつた門生の塾「詩星堂」のこと。秋聲文に拠れば、紅葉の反感というよりも、紅葉の冷かしの葉書に天外が「気持を悪くした」ことから疎隔が生じた、というのである。天外が「新著月刊」誌の川柳の選者をしたのは第二年第三卷（明治三十二年二月三日）の「第一回懸賞川柳披露」である。もし秋聲の言が正しいとすれば、疎隔はこの時以降ということになる。

その後、天外は紅葉の葬儀にも参列していないが、右の十三回忌の報道を見るかぎり、天外の紅葉に対する蟠りは解けているといえよう。

大正六年（一九一七） 丁巳 四十五歳

三月 一日より、東京オペラ館（浅草公園内）で、小口忠監督の映画

「新派通夜物語」（日活向島製作）が上映された。配役は、遊女丁山Ⅱ立

花貞二郎、玉川清Ⅱ秋月邦武、篠山澄子Ⅱ土方勝三郎、久世友房Ⅱ大村

正雄ほか。説明は土屋松濤が務めた。この映画は、十一日より、上野の

みやこ座（日活直営）でも上映された。

【典拠1】 オペラ館広告（『都新聞』大正六年三月一日付・四画）

泉鏡花先生 春陽堂發行 新に完成せる大寫眞 悲劇通夜物語 つや物語 説明 土屋松濤 當る一日の オペラ館
--

【典拠2】 みやこ座広告（「都新聞」三月十三日付・四面）

●泉鏡花先生大作、新撮影
新派 悲劇 つや物語
奇談 毒眼
十二日 上
一日 野
みやこ座
全四巻

【注記】

「年譜」では、「活動画報」（一卷五号、大正六年五月一日）、日本映画研究会編『日本映画作品辞典・戦前編』（科学書院、平成八年五月二十五日）に拠って記したが、「都新聞」広告により、説明の弁士と、同月中の続映とを補った。

監督の小口忠については、田中純一郎『秘録・日本の活動写真』（ワイズ出版、平成十六年十二月二十五日）に、新劇から日活向島の映画監督に転じた田中栄三の聞書として、「小口忠という人は、美容師で知られた小口みち子さんの旦那さんで、その頃としては珍しい速記術を習得しており、吉沢商店考案部（いまの文芸部）顧問佐藤紅緑の紹介で、同店の目黒撮影所の仕事をしていた」、「向島へ移ってからは、カメラマンに代って小口忠氏が専ら段取りやセリフづけをやったし、それが慣例になったから、小口氏は日本最初の新派（現代劇）活動の監督ということになる。」と記しているが、生歿年等は、いまだ調査が行き届かない。

丁山役の立花貞二郎は、高澤初風編『人気役者の戸籍調べ』（文星社、大正八年五月五日再版）に、藤澤浅二郎の門下、明治二十七年三月生、大正七年十一月十一日歿、と出ている。享年二十五である。三省堂版『日本芸能人名事典』（平成七年七月十日）は、生年を明治二十六年、とのみ記し、「東京生まれ。幼少のころから二代中村芝鶴に弟子としてあずけられ、中村芝鶴の芸名をもらう。明治三八年（一九〇五）新派劇団に転じ、立花貞次郎を芸名とする。四二年より映画にも出演するようになり、新派映画の女形として人気を得る。映画の代表作は、「カ

チューシャ」がある。」としている。田中栄三『新劇その昔』（文芸春秋新社、昭和三十二年十月三十日）によれば、立花の妻は川上音二郎の姪（妹さだの娘）澄子で、貞二郎歿後は鈴松と名のって芸妓に出たという。

弁士の土屋松濤は『日本芸能人名事典』に「明治三（一八七〇）―昭和二（一九二七）一・一四 大正期の活動弁士。本名は道之助。声色屋から映画説明に転じて浅草オペラ館の専属となり、新派悲劇の映画「不如婦」などで名声を博した。

大正九年（一九二〇）弁士の資格試験を受験中に倒れた。」とある。明治三十五年一月、山口定雄一座の「三升格子」（伊原青々園原作、市村座）で、劇中劇の「勸進帳」の場で黒子の後見が団十郎の弁慶と左団次の富樫の声色を使う、この声色をしたのが「千束町の松さん」こと土屋松濤だった、という（伊原青々園『団菊以後』相模書房、昭和十二年四月十八日）。前記『秘録・日本の活動写真』（ワイズ出版、平成十六年十二月二十五日）の二二六頁に肖像写真が収められている。

大正八年（一九一九） 己未 四十七歳

三月 二十日、『芍薬の歌』（装丁装画小村雪岱）が春陽堂より刊行された。刊行後、再版の一冊を里見弴宛に、扉へ「進上 弴様 きやう花」と署名して献呈した。

【典拠】『扶桑書房古書目録』平成二十一年夏季号（扶桑書房、平成二十一年六月二十五日） *写真の引用を省略。

弴宛の『芍薬の歌』は再版であることが注目される。鏡花の献呈本で初版でないものはむしろ少なく、弴の名前は当初献本リストになかったのかもしれない。鏡花の雪岱装丁本で見返しに木版画があるものは、本書と同様に書名は扉ページになされているものがほとんどである。もちろん木版画の上に墨で文字を書く無粋を避けたのであろうが、扉ページにも本ごとに異なる木版

画が部分的に印刷されているから、署名とのバランスが結構難しい。ところが流石は鏡花小史、ちゃんと絵柄と墨筆が調和している。本書も衣桁に掛かった赤い衣に寄り添うような自署が見事だ。

本目録掲載『芍薬の歌』は本冊は少し焼けやスレがあるが函は良好である。

【注記】

「年譜」では、『浪速書林古書目録』第二十三号（平成八年十一月八日）によって記したが、右により、贈呈本が再版であることと署名の様態を補った。浪速書林の目録には「函にあまり目立たぬ程度のテープ貼りあり。」と記されている。

扶桑書房の目録には、里見弴『善心悪心』の鏡花宛献呈本とこの『芍薬の歌』の里見宛献呈本がセットで登載された。『善心悪心』については、続稿「新たな項目」の大正六年十一月十五日の項を参照。

大正十四年（一九二五） 乙丑 五十三歳

十二月 十七日付「読売新聞」の「よみうり抄」に「泉鏡花氏 湯ヶ原から帰京」と報じられた。この帰京は、二十日付「文芸時報」（第三号）

の「文壇消息」欄でも報じられた。

【典拠】 「文壇消息」（『文芸時報』三号、大正十四年十二月二十日）

▲泉鏡花氏 湯ヶ原から帰京

【注記】

右の報は、同欄のうち「旅行、滞在」の項に載っている。

昭和四年（一九二九） 己巳 五十七歳

二月 十八日、春陽堂から恩地孝四郎の装丁による『泉鏡花集』が刊行された。扉の小照（前年十二月十八日、田中敏男による撮影）の下に落款

入り、初版一千部の限定本で、「照葉狂言」以下十八篇を収める。希望者には、表紙に真珠嵌込みの特製本も誂えた。鏡花はこの装本を見て「これではまるで生きながら仏壇に祭られるやうなものだ」と語ったという。

【典拠1】 『泉鏡花集』目次末尾（春陽堂、昭和四年二月十八日）

装 幀 者 恩地孝四郎

写 真 撮 影 者 田中敏男
昭和三年十二月十八日撮

【典拠2】 「春陽堂新館落成記念出版」広告（『東京朝日新聞』昭和四年三月二十三日付・朝刊六面） * 必要な箇所のみ摘記。

春陽堂は御陰を以ちまして復興の帝都に新装の本建築落成を遂げました。就ては御礼旁々右豪華版の出版を執行致します恩地孝四郎画伯装幀、菊判型三方金総革装、極上金箔押唐草総模様、本文淡色梓付二度刷、口絵局紙別漉著者肖像手刷コロタイプ版、特に各冊著者肉筆自署又は落款入といふ誠に本の中での本として敢て皆様の座右に御薦め致します。（…）

別製 真珠入定価金拾貳円御希望の方の御注文に応じます

【典拠3】 恩地孝四郎「自作装本選」（『本の美術』（複製版）出版ニュース社、昭和四十八年八月三十一日） * 書影の引用を省く。

春陽堂の豪華装小説集は、たしか六巻位だったろう。左掲はその一つ、どこもかしこも金ピカである。この書その装案したもう一つの方が自分は好きだった、之はもつと革の地が出る筈のものであったがやはり刊行側としては金ピカの方がよかつたらしい。革も丸革、金も本金だし、製本も入念だった。今は新小説社主島源四郎君が、その時のこの本の担当だった。中々の入念者であることは新小説社の出来のよさでも分る。出版部にかういう人がゐるとその本は非常にしつかりした出来となる。望ましいことの一つだ。褐色の

革に背には金茶の別革を、袖の中央は素色革を貼った。中の額縁内には黒漆押、そこへ金と空押が載る。中央の華紋は浮き出し、レリーフである。そこへ、希望者には中央に一つ真珠をはめようといふ凝り方であった。表紙の側本文からはみ出してゐる所、チリにもギルド押がしてある。むろん小口本金箔付け。何様燦然たるもので、泉鏡花氏が、これではまるで生きながら仏壇に祭られるやうなものだと云はれたさうだが尤もだ。本文も梓付で三度刷、その他その他。昭和4年初の刊行。

【注記】

『本美術』の初版は、誠文堂新光社より、昭和二十七年十一月二十日の刊行である。

この豪華版創作集は、他に『里見弴集』『島崎藤村集』『菊池寛集』『坪内逍遙集』の計五冊が刊行された。「以下近刊」として『志賀直哉集』『谷崎潤一郎集』の名が挙っているが未刊である。

須田千里氏（単行本書誌「岩波書店版『新編泉鏡花集』別巻二、平成十八年一月二十日）は、同氏披見十一冊のうち、別製版一冊（記番166番本、現慶応義塾大学図書館三田文学ライブラリー蔵本）を確認しており、書影は平凡社版『別冊太陽 泉鏡花美と幻影の魔術師』（平成二十二年三月二十二日、一二九頁）に収められている。架蔵11番本は普通版である。

典拠3に名の出る島源四郎（明治三十七年三月五日生）は、大正五年三月、十三歳で春陽堂に小僧として入り、昭和八年九月に独立して新小説社を創業するまで十七年間在籍した。この豪華版創作集の発行者は和田利彦、印刷者は木呂子斗鬼次、出版担当者の中に島源四郎の名がある。その回想文「出版小僧思い出話（11）装幀の話」（『日本古書通信』五十巻六号、昭和六十年六月十五日）に、恩地を語って、「先生の代表的装幀といえます」と「明治大正文学全集」が当たったものです

から、春陽堂さんが新しいビルを建てられて、その記念として前にお話した千部限定の豪華本を出しましたが、その装幀を恩地先生にお願いで、よろしい、ということになったのですが、島君しばらく待ってくれ、とおっしゃって、それから毎日神田の古本屋を歩いて洋書屋を見たり、丸善へも行かれたりして、一月ほどしてできまして、それで牛の丸革装、三方金の豪華本ができたのです。恩地先生の装幀のなかの傑作じゃないかと今でも思っています。」としている。春陽堂の新館落成が円本「明治大正文学全集」売上の利益に困ったものであることも明かしているが、豪華版『泉鏡花集』の装丁に関する鏡花の感想は、おそらく担当の島を介して恩地に伝えられたのではなからうか。

昭和十三年（一九三八） 戊寅 六十六歳

七月 九日、村松定孝が番町を訪れた。

【典拠】村松定孝「泉鏡花訪問の記」（表象）一輯、昭和三十三年九月五日）

いまからかぞへて二十年前。昭和十三年七月九日、当時まだ早稲田大学国文科の学生であった私は泉鏡花を番町の家を訪問、約三時間を鏡花と面談する好機に恵まれた。これは鏡花研究を生涯の仕事としようと志した私にとつて実に記念すべき一時であった。ところがその時分、うら若き学生の身で鏡花などといふ古ぼけた小説家を訪問したといふので、友人間に侮蔑の眼を以て見られたことは、小著「泉鏡花」のあとがきにしるしたとほりである。

【注記】

「年譜」では、『あぢさる供養頌—わが泉鏡花—』（新潮社、昭和六十三年六月五日）に拠って、昭和十二年七月の項に記したが、これは吉田の錯誤で、同書に「昭和十三年七月の、蒸し暑い夏日の午後二時を廻った時刻である。」とあるのにより、「年譜」の昭和十二年を訂正し、典拠に基づき、日付を追記する。著者の

鏡花訪問記は、研究の原点ゆえ、枚挙にいとまないほど書かれているが、日付を明記したものは存外少ない。典拠はその数少ないものの一つである。

【新たな項目】

明治二十八年（一八九五） 乙未 二十三歳

十二月 十四日の夕刻、安原富次の沖繩行送別兼懇談会（於神田開花楼）

に出席した。参会者は巖谷小波はじめ博文館の編輯局員、同店員、松居松葉らであった。

【典拠】 小波日記研究会「巖谷小波 翻刻と注釈―明治二十八年―」（「白百合女子大学児童文化研究センター研究論文集」IV、平成十二年三月。刊行日記載なし）

* /は改行。アキは原文のまま。

十二月十四日（土） 晴

午前河東碧梧桐来、森、細／川相次て来る 十一時出勤／午後四時後開花

楼、安原氏／沖繩行送別兼懇談会也／編輯員の他荒巻、大野、宮川、／松居、

山本及泉なり 妓、小丸、／お山、小、二、後日本橋より万作、／喜、鈴、

小柳及某来る 九時／帰途角田氏方連句 一時帰

【注記】

典拠の「安原氏」は、「編輯員」云々の記述から、当時小波の在籍していた博文館の関係者のうち『博文館五十年史』（昭和十二年六月十五日）明治二十六年の項に「十二月帝国大学古典科卒業安原富次氏も続いて入館した。」と出ている安原富次であろうと推定した。出身の「帝国大学古典科」の正式名称は、明治十五年より二十一年まで開設されていた文学部（十九年から文科大学）附属の「古典講習科」である（『東京帝国大学五十年史』上冊、昭和七年十一月二十日、参照）。

年譜本文には書き入れなかったが、参会の諸氏は「太陽」明治二十九年一月号（二巻一号、一月五日発行）巻末の博文館の新年挨拶（後付の十六）に拠って、名を確めることができる。「荒巻」は荒牧国三郎、「大野」は大野金太郎、「宮川」は宮川大壽、「山本」は山本留次で、いずれも「博文館店員」十六名中に名がある。「松居」はこの中に見えないが、当年の「少年世界」（一巻七号―十号、二十三歳）に寄稿のある松居松葉（のち松翁）ではなからうか。

「泉鏡太郎」は「徳田末雄」（秋聲）とともに、大橋又太郎（乙羽）以下「博文館編輯局員」十六名のうちに名を列ねている（「年譜」明治二十九年一月の項に記載済み）。

安原の沖繩行きは博文館退社を意味するものか、二十九年の新年挨拶には名前がない。会場となった開花楼は、神田区宮本町にあった日本料理店である。帰途立寄った「角田」は、小波、尾崎紅葉らとともに秋聲会を興した角田竹冷（本名真平）のこと。

明治三十年（一九一七） 丁酉 二十五歳

八月 一日発行の「早稲田文学」（第三十九号）の「文壇消息」に、東華堂刊の新作小説『夏ごろも』の上梓が報じられた（が未刊に終わった）。

【典拠】 「文壇消息」（『早稲田文学』三十九号、明治三十年八月一日）

●泉鏡花子が空前の大作なりと云ふ『夏ごろも』と題する新作小説は、いよ／＼此の度稿を脱して、書肆東華堂の手に渡りたりと云へば、上梓して世に問ふも遠からざるべし、子が同書の梗概と妙所とを記者の為に話されし所に依れば、兎に角、子が長所と特技とを充分に傾注せるものに似たり、出版の上は、子が現時の小説壇に於ける位地も弥々之れに依りて明に知ることを得べしと思ふ。

【注記】

文中の「東華堂」は「新著月刊」の発行元、神田区今川小路二丁目二番地にあった。同誌は、坪内逍遙門下で「早稲田文学」の編輯に携わっていた後藤宙外が、島村抱月、伊原青々園に、水谷不倒、小杉天外を加えて丁酉文社を結び、明治三十年四月に創刊した。丁酉文社の住所は当時の宙外の自宅である。

鏡花は創刊号に「化鳥」を発表以後、本誌の「賛成員」に名を列ね、「清心庵」「七本桜」「慈善会」「蛇くひ」の各篇を載せて著しい進境を示した。

当年の宙外の天外宛書簡（明治三十年八月二十七日付。「補訂」参照）にも、宙外宅への鏡花の来訪が記されているから、新作小説の「梗概と妙所」を著者から語られた「記者」は宙外である公算が大きい。「化鳥」の載った創刊号には天外との合著『小新篇「一人袴」』の予告があるが、この『夏ごろも』同様、未刊に終わった（「年譜」明治三十年四月の項参照）。

明治三十一年（一八九八） 戊戌 二十六歳

二月 九日、さる六日に逝去した巖谷小波の妹瑤芝（明治七年六月生。享年二十五）の葬儀（於赤坂成満寺、午前九時出棺）に参列した。小波によれば、会葬者百余名、大橋乙羽、尾崎紅葉、武内桂舟、同社中、長松篤琴、中村花瘦、筒井年峰、山岸荷葉らが列したという。

【典拠】 小波日記研究会「巖谷小波日記 翻刻と注釈―明治三十一年―」（白百合女子大学児童文化研究センター研究論文集）Ⅶ、平成十五年三月。刊行日記載なし） * /は改行。アキは原文のまま。（ ）内は日記の欄外表記。

二月六日（日） 晴夜雨

（…） 四時帰る／瑤芝病革 小西、岩佐両国／手来診 急性腹膜炎／遂に午後九時半死去

二月九日（水） 晴

暁四時脱床／九時出棺 赤坂成満寺／に葬式 後代々木村 狼／谷火葬場に送る／午後二時帰宅／今朝日下部兄公の一行着の／筈なりしも俄に汽車不通／にて間に合はず迷惑し（本日会葬者百名斗り 長松篤琴、大橋、尾崎／武内、同社中、中村、筒井、泉、山岸ら居り）

【注記】

小波の異母妹瑤芝は、継母茂登の第一子。瑤芝、さらに下の妹菊枝のことは「二人の妹」（我が五十年）東華堂、大正九年五月十三日）に詳しい。瑤芝は、明治二十六年五月八日大阪在住の弁護士不破光房と結婚し下阪したが、折合わず、翌年一月に帰京、そのまま婚家に戻ることなく、病を得て二度の手術を受け、死を迎えた。小波は三月四日上洛し、東大谷靈山正法寺に納骨した。瑤芝の遺影は『小波身上嘸』（芙蓉閣、大正二年二月二十日）の巻頭に掲げられている。

参列者のうち、長松篤琴は小波が幼時期預けられた北沢家の母屋の主人長松幹（実父修の親友）の嗣子、竹馬の友である。

【付記】

今回も、「本文の訂正・追加」が大部分となり、「新たな項目」は三つに止まった。新項目に重点をおいて続稿を期したい。

資料の調査に関しては、国立国会図書館、日本近代文学館、本学図書館近代文庫のお世話になった。記して深謝申し上げる。

（よしだ まさし 日本語日本文学科）